



類題發句集
春



多の菴の雨をうらむ 行ひ来ふ人の垣根よ
けふ秋草の危哉ははきと 去来なきわと妻と
たづ子母の月夜に 去来なきに 去来なきを
とれ哉いふがらまに 去来なきに 去来なきを
あまのけしは 容れぬと 興ある事なり 何れ
四季に 去来なきに 去来なきに 去来なきに
煤掃のゆき 去来なきに 去来なきに 去来なきに
此係と 去来なきに 去来なきに 去来なきに

今我いそぐる是へある海に我つる乳交句さ
 海へくかゝる梨出あ歌とあるのそこそうと歌く
 出つある首つおあつたうと月机の下にひ先重し我
 は比ま林何うく乳家男あ心入くと季り終へ
 偶分ととんといふりあをたつあ歌おへよん才
 屋たつあははまきとらひうとら心願のふと
 比らう我起ひとてきに名句秀逸と撰おつり
 阿次まとつりりつ及まもはあつたは後見此

春一

穢了恐しあ梨といくと俗此南へ春心り何れ
 己の先河んひとまふはあはとあをたつとへハ
 さのよやあつとけくとに数歌後句集あ
 名付くあつふ頃冬明和七まときこゆり冬
 十二月都者东山園崎の室己升庵の意此
 雪あまらに受束妙と蝶友の川うり所せ

あ

凡例

は集題の他例と考へ證句はあつらんをたれん
古くは句はきたに裁す中しよあ人の名句の歌へ
あ歌も歌の心たへあつる裁き今の入は句を
その歌は句の思ひきりて裁かぬ
四季の題は事查にゆく志れ家御命を歌ひよる

歌ひは歌りやうくちと志増山の井新く武古今抄
朽と春拾遺可くかき物系幼墨等の題をまて裁
考く題の取捨をた

四季の歌は中附句の用ありて歌句の歌かきる
多くは歌取捨又四方折ふ馬節今の歌
事の人北志るよあはきり花燈夕寒食の歌は
吳國の州汰きり思志文貴昆州所功德經のたひ
歌うく有る今歌查り強く歌事あたへく

この姿情茂とくまの載る

四季の歌に申徳社の神良法寺の法華の歌も
悉く證句茂奉るにや多形ありて遠近國の
事象と此を名換と志すしん載るたて東國あり
まればく祭刀及ひく歌兼種御法華の歌代
等他國より二月事の仍く筑摩祭等の古く
也及ひく歌一二古名此何茂奉るや世に余も
何茂志すむ

四季の歌乃中生歌植物の類より古今より此
祭句なる起る類然と茂とてて此句と志する
後の人志るときはん事をとす

四季の歌の名目此中更ふ漢名字義をたてさ
中い證句の集り利ひ事い俗談子語よりひて
教入山吹と云われ出た然し茂利也

四季の歌此外は神祇釋教悉く常述懐懐齋
羈旅名所等古名茂句茂あり先く歌の部と

好く附録也

此者の次女成つてある事、句の好悪より、次
其の此者の時代と、かゝる事、よくいふべき事、
同時に人々混りて志趣也

類題發句集春部

正月

蝶夢編

元日

元朝や非代の事も昔もハ新
草も木も目出度そよくけしき
朝夕老人も先づいふ今朝の春
元日や何よたふらん朝初め
えんに田この日をそあられ
元日やあや鏡りの太刀帯ん
元日や晴く花を物うら祭

伊勢 守武
未 貞徳
龍波 宗因
江戸 忠知
伊賀 芭蕉
未 玄来
江戸 嵐雪

花の春
立春
初日
初霧
初鳥

花の春
春の妻
けりては
去るは
けりては
春立ち
ぬれ
梅
と川
河の
初ら

専吟
去来
許六
野坡
色蕉
任行
支考
可風
野坡
馬明

春八

初夏
祇園祭
年徳神
元方棚
門の雲

初夏
と川
河の
賞
水
と
傘
琴
月
松

李吟
安室
百川
望一
休亭
一鋒
夕道
叻軒
去来
去芳

松加き架伊勢家ふ人考終
 さまくせりもさる川原牛
 しくふふ東雲まぬくそとれ
 白津葉や次青う家の大かきり
 勢つげり赤代わ加きり縄
 かき架縄や沖代の直れり丸の
 深山木や郊表春よりうけり炭
 伴勢海老や赤うて先は殺るく
 おう水やまよる川うけり氷
 夏水や冬冬薬子起りひとと

其角
 嵐南
 順也
 立圃
 可全
 移伴
 眠魚
 玄梅
 武仙
 野坡

夏水や冬冬薬子起りひとと
 おう水やまよる川うけり氷
 伴勢海老や赤うて先は殺るく
 深山木や郊表春よりうけり炭
 かき架縄や沖代の直れり丸の
 勢つげり赤代わ加きり縄
 白津葉や次青う家の大かきり
 しくふふ東雲まぬくそとれ
 さまくせりもさる川原牛
 松加き架伊勢家ふ人考終

乙由
 古山
 防川
 自悦
 如行
 北枝
 巴雀
 荷子
 立志

大ゆ
 難煮
 萬固
 流餅
 扇種

大第 蓬萊 喰積 掛鯛 野志 加栗 串揚 後儀

大第我々いふことく内儀は
 始末著わ太鼓の役は初は先
 蓬萊りてはしや伴勢のしん便
 ほうらふは兒といひの教用もあま
 くは津とや木骨の口ひん松とれ
 かや鯛やふ事あてて口と口
 如物あふ盤起しつた飛老り
 かち栗や餅り初とてはあま
 々々柿やあて一投り居るん
 種たがや炭の炭者あま起さる

招き 卯七
 加栗 秋之坊
 山店
 色蕉
 山店
 泥足
 和暢
 長英
 一思

橙 けり者 数の子 庭電 福菜 初曆 善始

けり者連ふり何はあけり者
 かはけりや我あふ茶鼓そ花の表
 敷意あまにふり小氏や庭電
 庭かまふ牛も軒裏はあまりり
 福月や茶鼓とてはあま一紀
 けり小のあまいりも初はま
 一はもあまいりもあま一初は
 善いしとてはあまいりもあま
 大津画の筆はあまいりもあま

けり 文續
 出於 千綱
 其角
 乙由
 宗雨
 宗瀧
 色蕉

馬女始
弓法先
松葉始
若衣始

昔そ先和栢抄の巻の十文字
糸初下り下糸あさるやつの巻
袋うらむも目録し可はゆめ
毎く巻小巻下巻の巻は危
若衣始巻の巻も栢葉先
母方巻收免つりや若志始
福葉の巻あさるも若衣始
と交はの彼の巻や松とや
高砂や大が巻あさるも若衣先
と巻も若衣の仕入を帆巻先

^{江戸} 湯門
^{近江} 木導
^{尾張} 留扇
^{尾張} 旦葉
^{江戸} 玄舟
^{伊勢} 山蜂
^未 春波
^南 今徳
^{江戸} 魯中
^{江戸} 友之

春八

高始
栢上
御初
若開
湯葉始
若解
若至

初布や巻し薄来るも若葉始
高砂や巻も若葉始
一と巻の公ささる先や栢抄し
すれを先や解及氷を引起し
海古の巻は実八と後へ巻ひは
家子たより引出物せん巻は危
月巻巻くあし使人初湯及
初解下師巻の巻もあさる巻
若解や若葉の巻も若葉始
と巻も栢抄し小師の巻も若

^{伊勢} 嵐南
^{江戸} 温故
^{伊勢} 琴風
^未 雲木
^未 立圃
^{出雲} 琴風
^{尾張} 船男
^{尾張} 和氷
^未 已静
^未 言水

力威

少く玉の葉もあつたのうゝ親の里
為業や海もくくふも欲れ才

宗陽
柳蓋

連て

連て車く子よ海をりり力威系

一井

系威

系威や九ありりむれを標松

去来

許系

許系よ入るあやう中福の井

飛明

名連

名連や時り初秋す川志門

松飛

妻あ

妻ありや都の町きん小雲系

巴靜

猿染

猿染り入るあやう中福の井

巴靜

山も

山も罷る川系も長系一太鼓者

秋月

長生

長生とあへく凡る謎者

狸遊

春九

ゆり

ゆり物あるは流乳の枕も表

堂厚

手球

振神と行手に奉て手鞠れ

孤舟

やみ

やみねりたり子目紅夜も替へ

嵐雲

やみ

やみねりたり子目紅夜も替へ

利牛

やみ

やみねりたり子目紅夜も替へ

木導

とゆ

とゆちや乳母も多流く二人張

松舎

表引

表引り地牛の角試たたく

其角

室引

室引り夜と床ぬ敷の獲り乳

李由

廣引

廣引りかてあやうぬ巴との

雨看

編つ

編つぬや蓋方の方へ枕せん

朝林

い糸つ

い糸つぬ

朝林

御降
 年男
 水祝
 子白
 小松引
 若菜

おきくらや十日の雨乃降ち先
 松の下幾千代くら歌くら男
 吹く男子秋樂と習ひくら
 板の乃に舞ひくら交りくら水祝
 吹歌くら女方松をん水くらひ
 一生のくらん保やあ祝ひ
 吹くら春と能高くらん初子白
 食くらもぬ物くらり出くら子の白
 己くら白鳥植くら移くら小松引
 茂蔭くら若菜くら若菜くら

暁山
 重軌
 春澄
 其角
 祇川
 松末
 也青
 白尾
 也蕉

一くらもくら一交摘くら森くら
 七色子若菜つと出くら言くら
 若菜若菜甘くら了初分畑くら
 常と畑くら出くらあくら若菜くら
 摘くら踏くら分くらら歌若菜くら
 行くら分くら端くらこくら歌若菜くら
 酸くらまて若菜つと出くら言くら
 くらら柳くら踏くら分くらら足くら跡
 情くらくら摘くらもんくら若菜くら
 ぬら椽くら若菜くら出くらくら

松末
 也青
 白尾
 也蕉
 松末
 也青
 白尾
 也蕉
 松末
 也青
 白尾
 也蕉

蘇籬

幸ふくくと雪射て来とあ葉黄
ゆらゆらく水より七子よりゆら
北のふとあゆむは那よあか
名葉つむ指の太さとあく男
志め叶まて許そ有(雪)のあか
七種やゆめより舞の杖の
とてゆらりも教は白へ分蘇籬
鶏よりゆらりもさきもゆらり
今のくも兒の蘇籬たよや
七子やゆらゆらくあかの中

蘇籬 未山
加賀 乙由
尾張 希因
上野 其考
一着
其考
伊賀 猿維
糸 我黒
北枝

蘇粥

福涌

初寅系

木芽漢

春下

笑れくゆらゆらあかあか
七くさわ次手よたくあか
あか板よきあか蘇籬あか
それよにたけあかあか
水鶏ももきあかあか
あかあかあかあかあか
ゆらゆらしあかあか
あかあかのあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか

江戸 景道
吳 松隈
蘇籬 此菊
江戸 其考
天徳 弁休
近江 見示
山母 圓入
負位
真石
真角

具足後周
 左義長
 綱引
 小豆粥
 粥はしら
 粥杖
 節振舞
 妻の内

嘗て我志地くくれと春かし
 伊勢湯志の鏡ひくまや具足捷
 ひのふやたしとまをた義長
 左義長や横也あてぬより
 綱ひまや若き師いふ神の意

風園
 許六
 季吟
 我鴉
 龜遊
 冬柱
 三敲
 孟遠
 不角

廿四日
 御忌
 木地の煙
 藪入

妻のた若と年まり松の内
 正月と廿四りあそぶ藪入
 松崎身ぬきへくは足湯
 ちりた女撞の書や御忌の子
 梅咲く木地の煙の白う乳
 書又へわ牛合点して大系近
 やかへわちたふと縁母り
 藪入や笑きへる藪あそろ
 若入の妻夜たのく文はり
 書又入りとのまふく火焼く

近石
 嵐雪
 其談
 玄高
 素心
 其角
 其角
 冷天
 咫尺
 達之

福寿州

木の芽

春の八和母へ二日の春はえ
春又八和如く子以摘り
福壽子事くに日出发根す
福壽子けき吸物と指へり
能中や海の内なる木の芽
そやさ風く暖る梢も木の芽
養虫の息受て居る木の芽
春菜のかけかゝる木の芽
木の芽芽と志くやる木の芽
竹木の幼儀也る木の芽

^{甲豆}我羊 ^永素流 ^近葵風 ^鹿文素 ^至露治 ^至露川 ^京素流 ^舞凡北 ^雪雪芝 ^山雪芝

下崩

莖立
若草

下崩や庭あそむゆか
子あやれまゆきと并へ
下崩やつた下りも花弁の
莖立や花も咲きて折る
如か草や松よけり花の
こゝろや終子は端介ゆ
若草や神あそむけり
あつ子やまゝに相
日々料やゆき彩色の
あつ子や安きと角

^柳二川 ^北北原 ^若若草 ^伊若草 ^松松弁 ^此此節 ^南南都 ^鬼鬼市 ^美美法 ^巳巳百 ^甲甲夜 ^風風睡 ^杜杜菱 ^温温故

女子の紫

梅

女子の人のしくを集るりり
敬この歌を山女子のあまき
梅のまりののり日の雪山は
山里あまき集連し起る花
なりの枝のまのや梅の花
梅の花を子母うておぬい
行枝り脈やかまふ梅の花
望ま候横りう海都や梅の花
愛に口きうせり梅の花
愛とて吾人きく愛れけい

梅中 沙文
かか 倚翠
芭蕉
其角
来山
与考
尚白
浴田
去来

同子立く心月をや梅の花
梅の鳥や火焼とまのまき
立たのゆ木と古ひり梅の花
愛と小首ひ初るや梅の花
愛一見一物梅のあまき
起先候や川の野分れ枝の葉
とれくり候梅の花と梅の花
枝ありは横射てや起先を乳
梅の心何の月ありおとや
暮しぬ人か心や梅の花

猿稚
源亮
新波 金羅
孤舟
嵐雲
地坡
去芳
惟光
桃陸

のみち海とのひて教さけ梅のそ
 朱砂色の小乃備や梅のそれ
 梅のそおきよつめ系色を
 起免さやか今里あるし角
 梅のそおきよつめ系色を
 久し〜て子なりう委女色
 何名かま川を横り梅のそ
 寒苦しとやけはほほや梅の花
 十八町尋り里何れ梅のそ
 委女や片投きか死に括かう

前川
 富良
 裁人
 勾空
 後古
 挑化
 了ん
 曾九
 乙由
 柳居

柳

何のそ教免懐とありや梅のそ
 委女や何れ梅のそ
 梅のそおきよつめ系色を
 八九町尋り里何れ梅のそ
 傘て押分入きり柳のそ
 死やん〜懐とありや梅のそ
 高向う不ぬれとて〜柳のそ
 己小おら〜とて〜柳のそ
 風ありに春の雨ゆ〜柳のそ
 吉の角とて〜柳のそ

嵐七
 千代
 五筑
 芭蕉
 不角
 木因
 春来
 其角
 長考

海より月けりあはれ物乳
 舟よりゆく鳥の羽の素の那
 吹度と蝶の尾重る柳の終
 柳の海を揺りて山を棄る乳
 引とせきと故かひとる素は
 人あの中へ志をたす形たは
 海入あうと日のあうとる柳は
 木免の眠りあうとる柳は
 俵子こゝ月のあふる素乳
 川とへ流るやう乳をたす哉

此節
 素乳
 吟風
 形坡
 浪化
 文章
 尾法
 外亭
 一笑
 心亭
 糸
 由平
 新法

風のゆく素乳しるの素乳
 舟のゆく素乳しるの素乳
 尺もろとるやうたをこめる柳は
 係物や素の乳をたす柳は
 水よりたへた流る素乳
 素直よ雨の境をたす柳は
 一舟もたすりさうとる柳は
 花さのあふとるやう柳は
 柳てあふのひくく素乳たす
 素直や二とる三節をたす

此節
 素乳
 吟風
 小春
 蘆子
 山川
 三河
 柳後
 三糸
 助豊
 乙由
 尾法
 木兒
 柳君

婿むこ死に

青柳や花さく木ら扇し死
給たま衣えくまへく遠とほる衆しゆの乳
さんゆりく水みづり漬ひる柳やなぎの
何なにも形かたちく二月にがつよ衆しゆ一ひと糸いとの形かたち
青あお帯おびやおまへにり春はるの色いろ
凍こ解とりけり風かぜも吹ふく
柳やなぎく木きらる山やまの乾かわきや落おの棠たう
そのくみ紙かみ燭しやくほてもぬまれ棠たう
く紙かみにちぬききるれ嫁よめ菜なは
二ふた葉はうり春はるあがやまらう死に

糸いと 布ぬい周しう 風かぜ之の
文ぶん素そ 乙おつ兒こ 秋あき瓜うり
米こめ蜜みつ 柳やなぎ城じやう 柳やなぎ休やすみ
すて 一字いちじ

當あ菜な

柳やなぎ子こ出いる小こ橋はしや河がはく交ま當あ菜な
くくみ菜な青あお衣えのま川がはは
おのくらくと見みる京きやうの水みづ菜なは

糸いと 流りゆう 馬うま 六む 尚なほ 乙おつ 語ご

水みづ入い菜な

我われ事ことと飯いひの道みち一ひと根ね芥かは
手てまらぬと終はつとあしぬ田の芥かは

大おほ 車ぐるま 白しろ 十じゆ 丈ぢゆう 乙おつ 語ご

芥か

若わか菜なおまぬ教しやく乙おつ語ごの根ね芥かは
川がは流りゆうや淡たん哉さいやまむらさきの角かく

三さん 惟し 猿さる 報ほう 乙おつ 語ご

角かくむらさ

まらさきへ海うみのやうにむらさきの角かく

三さん 惟し

松の若緑

のひくとゆふはぬきのひと
結る道の小松や若緑
黒深こは松のこちや若緑
候をわかちの松や若緑
くくひまも若ぬきと松の若
夕風や松の若ちる若緑
あやのん嫁菜よあやのん大根
味、赤の若れ白ひわ若大根
彼らも若ぬきや若の若
海、くくは若ぬき母の若

系 滴水
凍着
去芳
條皮
冬季
信位
北風
赤流

雲の荒

千六根

海苔

龍菜

山椒皮

海苔

鶯

春のり荒味をさやと龍菜
龍菜志く此も梅のちしと
山椒のからく皮ちくく此也
川水や何りそゆの海苔の味
若るんく吹なう候や候の、
のり取わかきくは波も立ゆり
若ちるや浪の若まて雲の色
くく若れまや園極の若の若
鶯も若れなけは何れも若れ
くくひまや若のりそ若の若

系 蓮中
若菜
其用
素也
冬季
信位
北風
赤流

くくあひや餌子養美止る様の足
黄名や汁枯枯紫と踏為一
くくひまの身と近りおせり
字久勢成や葉の木切古乾之夜
寫や約のち啼と世うも
くく寸やせとくくさ成起り
黄名や相根と走とる世の中
考や雀さやくと聲も成る
くく成止にやと息もる胡れ
常やつとくく下りふ物の花

色産 荷子 毛角 丈子 玄来 冬考 木因 地坡 嵐管 北枝

考や老啼て無故くく在公忌
考のひといと出とる枯木
黄名此一考も念成入より
あつりと直計れく初事
くくひすの初事と今時の初事
考や必為積り初と川考
黄名や考よまると考も無名
くくひ考や啼て無と考と考合
黄名考や考の考く考初問
はつとと考よめと初考うれ

如行 科炭 利年 普西 惟然 十丈 及朱 浪化 林如

百子鳥

水鳥

白魚

雪や加はる冬は皮へ起て川
とそ花のふも枝く初春は
芳き如きくも春の古うり
五子鳥の都あふ春の如く
川とそ春の梅を百ちや
鶯やさえつる鳥は水うり
白魚やわへうり鳥と以の
志る春の餌り本物と鳥の
白魚やるまきくは消ぬへ

童子
春元
乙筑
尚志
其角
其角
文泉
猿
白鹿
松風

千鶴

蜺

蛤

魚水

懶名

春風

白魚を針くつむる蜺うり
白魚の志る白ひや枝の葉
ふ多り價あつる鳥と以の
海に鶴の志る春の鳥
一升鳥かよふ鳥と以の
鳥と細くつむる鳥と以の
蛤や小へかきく鳥の志
魚をく破る春の氷の那
懶のまきく鳥と以の鳥
春風や麦の中川鳥の志

角呂
柳林
桶始
白堂
其角
其角
孤松
其角
其角
木導

雪解

春風や二條の松系清見寺
矢の点下ぬるも度は春の風
旋子の尾ま春風ゆく日乾く
とらさや夕の裾より松の香
唄をぬ遠人あけし春の風
春かきや布よ水きく小石系
おきくひのそをあやや春の風
雪かち衣ちおれもや春の風
春風より川と粟の枯葉も
雪解や於へ出く下駄の跡

免責 許六 尚志 潘川 兼太 既白 春渚 康工 煤爰 治徳

雪汁

雪解や刺の刻木のさし取
かきま川く炭火くさる雪解心
雪とけて仲津川流り来り
雪しぬわととれおしと小藤系
雪汁や喰いしん坂衣すま
候く下塔の雪乃れ来り
枚起て畑衣入さる雪乃れ
雪の香にささる雪の香
雪の香は衣の香く見たり
雪の香のささる雪の香

水魚 青雨 暖巻 子母 木心 乙妙 毛角 涼若 正秀 虚心

残雪

春雪

春も満ち雪よまらぬ世に
是まらぬこと春の雪
春の雪雨かよふも春の
下霜の素色とけぬや春の雪
ふんばる梅の枝と下霜の
けしき板の筋とけぬ春の雪
侯雪や一つとけぬ春の雪
傘を雨く度や春の雪
凍るや春の雪とけぬ梅の
雪よりほらと雪の氷の

凍解

武後 阿比
一笑
李由
伊賀 冬日
系 吾伴
尾張 氣弾
巴靜
去芳
小枝

水ぬるむ

凍とけぬや春の雪のゆく
けしき帰てぬの入りぬ氷の
まらぬよ氷の筋とけぬ川
舟のやめぬとけぬ枝の
残の小唄も出ぬ水ぬる
ぬるむとけぬとけぬ水ぬる
けしきとけぬとけぬ水ぬる
ぬるむとけぬとけぬ水ぬる
ぬるむとけぬとけぬ水ぬる
ぬるむとけぬとけぬ水ぬる

夜

一海
仙行
傑友
乙筑
運燧
阿比
文水
夜風
芭蕉
言水

清夜

幸望のまや菜種や朝のぼり
舟の明て舟をまひくかきまひ
柴舟の立枝もろや和夜
仲り帆の折もろく夕燈
ありありふと暮るる夜
海波の立かたりてや船の
帆張らる轆轤の七も朝の
露もろの空を捲く宵の
夕暮れ如雲我を後に清く
我ち舟を停と持りて舟

老境 荷子 希同 多醉 寸文 後川 尺布 幽泉 子風 蝶友

長閑

のびたさや海がーい、海客よ
長閑さな物も心ぬ如き
長閑さな物も心ぬ如き
くゆるや田の巾もろゆる水
くゆるや田の巾もろゆる水
くゆるや田の巾もろゆる水
くゆるや田の巾もろゆる水
くゆるや田の巾もろゆる水
くゆるや田の巾もろゆる水
くゆるや田の巾もろゆる水

木節 杜園 利牛 一有 碩菓 菜花 雨竹 萬國 秋風

暖

暖りきくけくも春泳の風

秋風

凍寒

くひまの折つりきりきり
撞りまきりきり改中
彼岸あききり一夜
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
嘆くけり物も破る海
宵戸中あきりり田
は文へふれふれ大
佐保非やゆゆゆゆ

文考
仙化
乙由
文考
文考
泥足
嵐陣

二月

春七

二日矣

初午

薪の能

ききり地や名あきり
親の悪きり二日矣
きりりりりりりりり
初午や下向と酔き
はつむりや志きり
きりりりりりりりり
初午や下向と酔き
はつむりや志きり
きりりりりりりりり
初午や下向と酔き
はつむりや志きり

千部
志士
北坡
吾仲
山只
也育
其角
宗子
治徳
録受

二月修法

張載抱松明

涅槃會

水とらやきり九佛の皆かんき
吾けく美杖の水たつめこと
松州や鶴舟林のりまきり
春のこいりに山風のふちり
黙る孔ふ顔あり神え像
涅槃言や致子合とる珠教のま
孫子少とふかきえ涅槃の
たけいふかありと徳も涅槃像
乞ふも後教もく福もえきり
木仏も時傍もくく涅槃えきり

也蕉
玄梅
方山
神明
季吟
芭蕉
伊賀 孫子
孤舟
己百
許六

涅槃言や片肌能漢力外
神もい像りるあ親か立佛
有くく候りりて涅槃像
涅槃言やきれつるまき日の光
大佛也横案もあん由八滅
志信り死きりひあり孫もい像
手枕の樂もあれ知涅槃言
至度まははれ先也二月神も人像
神もい言や力とち先てと及も
涅槃言やも在も薬取もり

若殿 謝松
龍次
寸き
言水
不玉
乙由
木兒
玉川
伊賀 入楚
止弦

新葉律師法

貝寄風

彼者

念佛證
法華函
獲月

如月の影のさしぬぬ
貝の音もわきまなく
楓さくさくふと
何れ見よ彼者の入りたる
乞食の法辨しよる
うさくさく花を
うれへい念佛
法華函の中
ほくほく
流舟のさくさく

秋書
車馬
支考
吾伴
季友
嵐雪
友松
志水
右根

梅の恋やむ時
夕風より何れとく
梅さくさく
水風鳥よ
秋たよ
葉の影
まうの
青空より
海棠の花
何れを

色蒸
水枝
言水
支考
志水
秋川
、
将松
秋我
物豊

鶯の衣あはれとあまの梅も
梅の夜や梅の枝木のみ花も
何れへ切り水もさきに梅月
公の夢よとて梅も花も梅月
梅の夢よとて梅も花も梅月
夢よとて梅も花も梅月
帆柱のほろひも梅も花も梅月
六無り沙も梅も花も梅月
ちの夜の言も梅も花も梅月

梅月 春波 范字 希周 徐寅 秋瓜 可風 唐元 梅路 改白

出代

夕の心も梅も水もさきに梅月
梅の夜や梅の枝木のみ花も
何れへ切り水もさきに梅月
公の夢よとて梅も花も梅月
梅の夢よとて梅も花も梅月
夢よとて梅も花も梅月
帆柱のほろひも梅も花も梅月
六無り沙も梅も花も梅月
ちの夜の言も梅も花も梅月

梅月 春波 范字 希周 徐寅 秋瓜 可風 唐元 梅路 改白

陽炎

出かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
出かきうやゆる借屋よかき借屋
出かきうやゆる借屋よかき借屋
出かきうやゆる借屋よかき借屋
出かきうやゆる借屋よかき借屋
出かきうやゆる借屋よかき借屋
出かきうやゆる借屋よかき借屋

未 友元
伊 龜野
伊 若本
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由

かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋
かきうやゆる借屋よかき借屋

乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由

かしらるる川の流るる蛇うく
 りあろりや去の白ひや車道
 陽妻や横り海しるる所の桶
 か糸海ふや下物ほく所お才
 鷹化して蛇の代あり蛇の巻
 胡鷹や出るも戻も小くり
 とわあまの巻はけしる白巻
 月入く守と枝折や仰り枝
 おろふ山お目さえつ仰り山
 言消く大声あく歌小そり乳

描 荒草
糸 昔山
周防 唾瓜
か 枝系
白 其友
白 貞位
白 飛水
鳥 鶏口
鳥 鷓鴣
鳥 松鷹

特やすくあさうふ候まを
 つりたふ名や鷹たまの巻
 巻とさうふ名や巻とさう一造化
 去死り巻まゝ巻を花う乳
 糸物巻り引くもろす巻
 巻は巻や巻一巻の巻る巻
 鳥の巻や巻舞の工かか肩
 蛇くると巻も恐るる巻
 何事のおおたさ巻と巻
 巻ひ子と巻るる巻の巻

鳥 蕉草
鳥 左使
鳥 鳥鳥
鳥 為有
鳥 可吟
鳥 妻雨
鳥 芋月
鳥 芭蕉
鳥 凍老
鳥 千那

遠きもひくけと旋子のほろろれ
ふりく北歌や旋子の炬の那
春の陣と何はつとれおりの春
夕しや暮るふ旋子のむきと啼
静よと啼れぬ那の調子うれ
山の幅啼ひつけとる旋子花如
岩角よりあそびとやきくの巻
春の舟とたこのやれおりの春
何れかや春の紐や夜の旋子
笑へんうと短業くおりの春

去来 其角 入山 那坡 荻人 那明 岩虎 巴静

燕

秋前には燕くかへく旋子の巻
かまへと春とつれく旋子の巻
扱立ぬ衣くま外北の巻
啼泣の形く静きと旋子の聲
那山より外より春の巻
春の事たた一おりの巻
何れか旋くつとる巻
意より流るる巻
あつ風く流るる巻
松かまひと巻く巻

淇園 子代 周外 初丸 困更 桐雨 涼菫 芭蕉 女丸 去来

戀や一子哉昔ふ方の侍はるか
乙名物田を焼くくまあるの地
か女衣化粧の中やゑつと先
蕨や世より来らて長ま回も
山の想たつと先をかまへる
榮花中や男女細くて親つと
貞留りたぐき入る乙名か
乙名也榮の中と海女私結
月神りあふれて仰り燦るれ
玄名如何女衣か才かへる

山姥 金蛇
山姥 山姥
木導
羽林
金角
峯流
養女 扇舞
老の
小春
乙虫

白鳥
箱鳥
松子
帰雁

在の中は様も志ぬ燦るれ
かひとのよりあそむて先燕う那
巾着冬表うらふ通ふ乙名れ
暎やかかきとと雲の顔とやう
果空りやゆき多れりゆき子山
ゑてまき入るうらや松野に
子代を授け枝も志ぬ燦るれ
麦喰一丁と持へいふるれ
ゆりくしゆりかきてや小田の鳥
帰る雲あきてや秋のやと先

白鳥
乙兒
和巾
可枝
曾衣
山姥 怪蛇
雨諾
野水
涼羌
文章

かゝるをわがまゝとせばのまゝ
帰る厚米つまらぬやあつふ
夜通しに何れ油丁のいそがし
立さく今や紀の厚伊勢の丁
たぐさるる麦の中よりかゝる厚
何事と田圃よりかゝるかゝる
吹礼とくま交りし厚厚が
まろくと移入る者かゝる丁
友喊く啼きよゝあつふかゝる
伴とく名おと一々立増ふ

本末
牛角
浪化
伊勢
津雄
天保
荊口
子英
嵐雲
朱杜
具稟
女中
あま

卷廿二

雲雀

来るをりも目出度あるか
原中や物も針のさし
長き日哉啼うたゞを雀は
啼く〜風よほ〜ひ〜
夕ぞ花日影追へ〜入〜
風よ姿よあ〜つ〜
東雲とあ〜か〜
き〜又〜子〜
三日月と踏〜
枚の木は乞祝よ〜雲花が

雀九
芭蕉
孤登
之石
懐巻
いち
如泉
三子氣
氷花

考

子やまゝんわまのまを花のさう
春風より力くくふを雀の北
馬を物ひつりあやのまを
日中のまをに飛つるひんり
作向より度く見え物ひひり
夕むもま登の日和れまを
作向も下うくまをく雲程が
氣をやうたあまはまをひんり
中つりの夜よまをれ電花を
花のまをまを響のまを

枝丸
地水
李中
藤山
除風
乙南
杜榮
紀六
千代
山只

香九三

駒考

花の子

蝶

駒考此花あひひり 岩中
まをまいさむんや駒考のま
花子とあまかたは氣を
人の親乃鳥追ひり花の子
まを花や姉よりひり歌子
蝶種くはまを物あひひり
起るく我友まを人ぬか蝶
まをまいさむんや蝶考のま
酒くまを人ぬかまを
ぬまかまを蝶考のま

その
ゆ考
芭蕉
免黄
櫻市
湖春
芭蕉
嵐茶
九雲
乙翁

くらがくし麦の取ゆふ胡蝶が
 せまりてこ胡蝶くちか蜂の
 ら川うらこ手却る花のあはれ
 楊の子れんつほくも川とてり
 蜂くや死のゆく日のたやま
 思ふも昔まふまふか蜂が
 死に下海のかまもるまてり
 物いこく花とすけり胡蝶が
 道走り落て多つて死のてり
 蜂くや忠臣人とけり

曾良
 柳壺
 祖聲
 そ角
 山道
 木周
 出飛
 堂行
 柳居
 蓮之
 江戸

蜂
 何の草そきく蜂のまほりか
 蜂くやけりあまのほく
 てりくや川出てま雨り
 蝶くや女子の道老花か
 蜂くや蜂のけり
 先へて傘の上あふ胡蝶の
 山吹よ何れいらく蜂のあ
 蜂の巣や一るくり見れ
 蜂の巣や留まるとふ過し
 蜂の目の何れけり子合鳥

五筑
 秋凡
 江戸
 鳥明
 子代
 未女
 芥之
 横坂
 白石
 魚日
 未
 桑二
 横坂
 杜洲
 友考

蜂
 社

蛙

你向うとあきてりしや蛙の足
能のあき子の破きと即ち
お針ぬかしくうかふ川が
橋をくぐり静る蛙の那
西の蛙あふりあも衣に
葉が花城をくちよけあて
あかしく蛙なく江乃星の教
清立ちく入相成ぬかす川が
飛入るくさくさあり蛙うれ
きろく蛙我類とれ蛙う那

出方
おれ
智強
丈草
涼巻
糸巻
李由
毛角
落格
嵐景

和歌の蛙集あまんく蛙うれ
夕々蛙名雨戸よ庭系不蛙う
蓬たよりせぬ常あ蛙う
田鼠まぐくくくあれぬか川が
いくまて骨とる巻のくく川
朝つく日宵中の光蛙う那
弦指れ日蛙うくく川が
川あふり足子とのあ蛙う
傘張るくく合よ集蛙うれ
うらち川よあくはくか川が

出也
西吟
言水
北枝
太来
乙柳
乙由
芦本
負佐
麻文

田螺

地虫出

蛙子

後夜の水さへうへに蛙う乳
 有周や、爰に踏乳となく蛙
 一思素出まへてゑまを蛙の那
 立すれ水よ集りてかろ所が
 加う子にう川まれこつてま
 出川やとくく、是を蛙の子
 蛙子や何あくまれば水の子
 ちんちん出けやん代巻く
 あうまを穴よあつてや蛇の面
 つくくと泡ゆく畝の回あり

秋瓜 手集
 風傳 伝法
 鷲山 伝法
 粟里 死後
 林亭 行法
 砂埜 行法
 味山 母法
 朱陌 母法
 四膳

春世六

鐘 初樹 龍 飯銷

仍承る子踏あましうる田あり
 系政う行目成捨ふ田螺う乳
 ぬり立の跡をゆりあつ田螺の那
 あまくと空乳と敷田あり
 流るへ出ると流る大あり
 ゆりて敷ぬりあつて田螺が
 都八巻、思木とあんんる力一担
 是川樹老独活か敷能う乳
 美能の中に抱ふ系りあつ乳
 飯銷ののちやあ風く果るを那

猿雄 尾後
 七角 尾後
 十丈 尾後
 如作 尾後
 心弦 伝法
 牛丈 伝法
 曹北
 蓮堂 伝法
 善寺 伝法
 末山

猫の恋

飯章とや八道の鳥の立ぬら
猫の美寛の品もとら通ひら
味切り事ておくらわ猫の恋
猫のこ美飽の貝やかおかり
神このひおきう味て表
あ方り終、有、猫中名ひ
うたきうたてわ猫の望くひ
うは、好く事う、猫の法りら
二三日内少、有、此、神、こ、表、恋
日南、少、尾、の、す、う、わ、猫、恋、恋

惟烈
芭蕉
公来
秀如
神坡
末山
支考
尚玄
舎雅
巻黄

春飛七

とやをよ此、わ、猫、恋、あ、か、ま
猫のこ美飽の貝やかおかり
思きん、多、猫、の、を、中、名、相、あ、り、わ
う、わ、味、お、ひ、お、り、耐、猫、の、ひ
お、ろ、く、事、よ、味、を、猫、恋、恋
猫の恋位く飯を喰よりり
歌もとら、お、り、多、や、と、神、の、恋
朝の事、あ、と、女、猫、の、こ、う、ん、が
床、お、ま、の、笛、少、初、久、猫、の、恋
猫のこ美飽の貝やかおかり

楓林
琴風
秋老
裁人
車看
友朱
林和
兔士
嵐七
丈石

麻の角

何れ日の死より後こそ麻の角
やまうれはまよなきまや麻の角
恋成せし身は悔てや麻の角
角落く三日をしのぶ男麻の角
付の麻くやまも又あり小麻の角
麻は平置きしりら麻の角
角落くまのうけく鹿鹿角
神崎や一むく世のさええくら
雷震まの物出りはとまへく
かきおしはえておと取落く

初雷

猿轡 ^{女中} 雲江 ^{伊勢} 貞節 朱松 蕉笠 魯丸 蝶夏 去来 涼巻 秋坊

春飛八

お梅

あてもれお梅より梅光り
お梅の日はあして後の赤きれ
お梅のほろよほろく咲きま
お梅やふんはむきさ敷仕舞
お梅や管も笠のおまのこ
うもいや白あ事あひまれ
お梅知りて冷えお梅てれ
黄巻やまも巻まの相合川
お梅八重のひくくのぬあ
咲くらん梅の市くらん梅

黄梅 初梅

吉良 知行 ^{武中} 梅仙 毒手 以恭 布衣 ^梅 冬粒 ^中 芦水 ^京 和及 芭蕉

彼岸接
糸接

先下りの春きつてそ初きう
あつねのけさうはむらり川林
さし接まきと遊くは咲かそ
あつちまきとひきけし初接
みよお井のいやはうさき
人かきまかく親し初接
たつ戻つてきまき川接
泉せぬあきう彼岸接
清持く咲きひうん接
あまはむらり木の枝やうき

一笑
千那
利雷
鬼黄
乙妙
治位
夕代
岩草
風早
乙妙

椿

糸接 能ともちる花 為う乳
百筋と春のきこり糸接
雨の白多きときと糸接
花きふりあき川う花接
と云入る冬ううつ糸接
鴨かきうう川て接
あかうりも川のきき接
あつちまきとひきけし接
あつちまきとひきけし接
あつちまきとひきけし接

乙妙
乙妙
乙妙
乙妙
乙妙
乙妙
乙妙
乙妙
乙妙
乙妙

種うし

種蒔

種芋

種芥

種蒔くはつしつる世川が
種加や太水宮へ一はふし
麻蒔や道よ一癖の針あき
種まらわ磨の外下雨よに
た子芋や花のさくらば葉わら
種芋や植ぬはえうき芽又
種くもふえく知り男うれ
ゆりと秋湊の光りや虫の種
知るもくつれ家の糸や川白
こもちやまじく志願の如人

永 辨石

二 夕角

伊 曉雨

伊 氏古

武 芭蕉

武 吟風

武 冬来

武 秋風

武 秋之坊

武 乃露

焼野

すくろ為

山焼

のひ家

胡葱

葱の室

昔おのけ先や小田の荒とに
山岩や小松の葉子焼種が
名はり焼種は根や風の末
とややくはまきと次出中焼種が
雨ふれや去手のまくらの子をら
山焼くも葉子まきみくまらり
山焼や路り入日の焼種り
焼たれ葉子まきみくまらり
おき川支冬およゆれらる白くれ
縁のまて一夜寐より葱のまら

伊 煮程

伊 乍木

伊 猿維

伊 呼丁

伊 水札

伊 魚目

伊 異花

伊 神明

伊 汀芦

伊 本残

独活

烏芋

七菟

救急

吉加

香気物 地をこぼる 葉を食す

尋こや吉加 下の独活のえ

徒子のほろ 皮を食す 葉を食す

七菟 根を食す 葉を食す

育の雨あつた 葉の長し

ほろし 瓜の皮を食す

葉を食す 何れ 伝やつくし

道へ 烏たを食す 救急が

如の 葉を食す 葉の長し

加 葉を食す 葉の長し

来山

独活

根推

根指

塩車

支考

牛代

治位

馬鞍

我馬

防風

蓮桂

山葵

葉の葉

子かた

麻

今に 入を 鼻を くら くら 入を 何れ

唐の 根を くら くら 葉を 防風

海へ くら くら 葉の 葉を くら くら

極よ 根を くら くら 葉を 指所

根の 根を くら くら 葉を くら くら

と 葉を くら くら 葉の 葉を くら くら

と 葉を くら くら 葉の 葉を くら くら

葉を くら くら 葉の 葉を くら くら

葉を くら くら 葉の 葉を くら くら

葉を くら くら 葉の 葉を くら くら

佳木

葉の

於山

支考

支考

紀末

葉の

之冲

由之

七考

うし車
若紫
落葉
菜の花

物春の巻よりあつた蔵うれ
仙人の墓に指さして蔵
子蔵や並とら山者抱り
とつと女家の持よりあつた
瓜取や日ち起ると好初海紅
たんぼやまをさ下まよ受て
鞍馬や徳もさきと鶴より
半んぼや志事さくし伸たり
菜の花や花もあつと高し水
かおむや一本咲く松の下

冠電
道子
正秀
兼山
志山
秋瓜
鶴志
雲郎
言水
宗周

春四十三

大根の花

菜の志わ小巻らりあつと
たおむれや枚菜の去りあつと
菜の花わ戸口をけりあつと
菜の志わあつとあつと
かおむれや赫爽とあつと
たおむれや小家の隣とあつと
菜の志わあつとあつと
かおむれやあつとあつと
菜の志わあつとあつと
猪たあつとあつと

史邦
長缸
嵐
越菜
押右
以之
淡々
玄武
蝶美
乃屯

三月

上りの音

照れ枕ゆきと八雲の音白が

方山

一日あ挑あまはるきと都丸

寧陀

曲水

曲水や筆の流る御溝水

角上

川下てきとと盃あきとんまり

兼笠

曲水や岩よ三つ川廻りくも

希岡

曲水了極流く山路りれ

大光

殆とくそ強ひきりり能の歌

七角

能の振宮獲くはゆりき

能

春四五

春風より二かた子能の駕孫流

萩子

元の子よ餌とまわりも能丸

如行

姉妹肩お流りぬし能の駕

斜嶺

春柳りのまぬ能の屏風が

風國

振舞や下座にあをるまの能

去来

能の口飯つかけく屋よまきり

天和

能立くく乃よわさるや娘の子

了ん

氣より入る一使きり能まきり

荒洞

おつそと申るくは能丸

許紅

おつそと申るくは能丸

乙兒

草の餅

柳太刀
鶴合

常分衣きてはあらん草の餅
摘てふ小杵をさしつゝ蓬餅
源氏強の夏の新や草の餅
草餅や草の餅を交し地の白
草りもや秀多おをけつこ
餅よりさる色も青し草の餅
みまふひを赤うつらも顔つま
君だけや孫と結し柳太刀
鶴合も柳子と飾く逆毛も
順礼もさしはよ柳太刀鶴合

嵐雲
乙由
近江
理翁
馬六
七噫
但馬
乙柳
一桂
之角

汐子

揚舟もいかに苦く船やう合
衣く子孫恨らう鶴合も
常分の白又位の上り鶴合
青柳の尻も志らう汐子
う帆の淡路もあれぬ湖子
駕籠のりて淡路へのん汐子
海風も松も飾りて志らぬ
三日月や汐子も志の海も来
をさるるも汐子も田植櫻
帯海も大川のなまき汐子

白
婆心
君里
芭蕉
素来
如象
楓林
木周
女我
沾徳

古傳の法取
念生念佛
御身杖

きんうり鳥出地り見て形はゆき
彩田よあつち中しく志はひれ
みちもよ松系志きおひ千びり
入る物のかきくともゆりぬてう
ふ浪の入り追新志存ひひれ
ましくと定らるへくゆき
現とら法取もきれて古傳の法
雲波のりりあまもも念生念佛
ちれ志の面白もあつち念生念佛
梅檀の香らきふとも暖裁の志

此木
乃露
卷士
若雨
仙李
梅川
太祇
菊二
白扇
春四七

峯入

永文日

峯入あ言も子鞋の旅取れ
峰入や款上先針ら 鏝衣衣に
永文日や子よにあつて夕馬
かふれ目や仲志え木のよりの志
撒法衣衣衣れつる日の志
永文日や清くつる志
永文日や徳とつる志
かふれ目や仲志え木のよりの志
長あつちやなつち次身の祝あつち
若借く及つちばら志のれ

宗周
古芳
道春
勘水
許六
上枝
朱迪
素丸
文意
阿誰

春の日

永文日や分秋の芳形も雲の裏
春の白鳥を佛ゆる此処も
とらぬや葉の未留よ小法師
春のりやあゝあゝ出ても昔は
ゆけり外妻あゝくと春の雨
春雨や竹の葉つゝふを根の漏
物とハまき子のたゝらや春の雨
春雨やうゝあゝと遠く石打毫
とらぬやあゝあゝと夜の穴
春雨や火燧あゝと足と出

下野 松路
尚ふ
正秀
加賀 見風
玄肯
芭蕉
荆心
秋風
文章
末山

春四六

春雨

月夜の目次や目次を春の雨
はるあゝとらん日次りれ
あゝとらん春のあゝと
とらぬや春のあゝとらん
あゝとらん春のあゝとらん
傘と出るとはうゝと春の雨
横りあゝとらん春の雨
あゝとらん春の雨
春雨や葉も枯るゝ春の雨
春雨や葉も枯るゝ春の雨

与考
き角
一笑
友元
本堂
向空
林の
乙由
相之
香布

春雨や四葉に葉のやり木履
 用帳の跡よ起日くさ歌のあゆ
 終子とららぬぬあふ春の雨
 去るや笑しう野村とらら
 夕飯多食て志まひり春の雨
 春をや出いへ事てと海とる
 一日冬内と飛くとも春空の
 去るう眠さともや春空の
 去るう眠さとも火焼と寒さ
 かく病まついふ事あふり

北俱加賀 素風
 杜菱
 千代紀伊 枕花
 文芝陸奥
 蝶友出羽
 惟中
 調敷
 子那

別業

田氣鴛成
 郭公の葉
 葛の葉
 鳥啼る
 雲合
 麦熟
 吟子為

唄うり唄と毛の尻やうらうら
 川表は葉うら歌や和らあ
 考れ葉と志風梢は葛の如
 麦とらら去るさうた友とる
 鳥雲う舞さう一人の川出さ
 雲に考何は尻針と遠くも
 秋の麦入るや啼かぬ麦うら
 吟子とらら種と出ぬ麦熟
 深山路や何とも唄へし吟子為

入世
 茂秋
 北枝
 米良紀伊
 苔城紀伊
 芝南
 朱杜
 万子
 包静陸奥
 万流陸奥

櫻調 櫻園 櫻くわ 柳の家重 上り梁 若船

美の霞何やくもあつ子そ
 毛うと節たつとそれもそ
 彼の志ちうそや種のとさう更
 ちうころやゆ石の網のむさう
 櫻網笑りそくより山重
 一羽り櫻くわと嘆きり
 春の水は秋の木は葉と柳籠
 ぬまもも春ふ春の葉重く
 おくれあつ急の競ひわらう梁
 雨美しくあつちうはく小船り

三子風 西鶴 休夜 素老 琴風 兼吹 嵐雲 翠樹 高岸 圃水

春五十一

坂巻 坂船 菓子

船の子はかすはまー津の言
 有船者船の一は雨りたつ女
 儀壺り命あつ小船り乳
 ちかか念やそに汲る小あや
 くし船り板りひうと入日敷
 有亭ととに老りり坂の名跡
 坂巻の穴のきり坂りまそ
 坂巻あつとく船りあてや樹の色
 坂巻や冬の下老節船り
 蟹もあつあつ古代のまうと

古芳 才磨 為有 東傳 鳥仙 楓林 万子 園入 意程 曾良

葉摘

若布

你及せらふも政とらふ蚕りれ
靡て起る喰ててこそ葉摘り
下筋の造りてこく蠶の那
青くさく蚕畑の家結多海くら
三月や冬の糸糸の葉一本
葉はちや畑の支とてあきら
葉つちや枝り夕日のあきら
糸糸布法を法名もあまて
乙能のまゝ和布成るあきら
一雨を和布り悪む日あきら

味雨 看也
青豆 若中
露也 まに
青雨
支手 若也
十川
鎌麦
若布
涼菘
一布

春日七

挑 浮世初

うねまやきとてまふせ所
越川くと白糸を糸 柳の忌
餅喰ぬ穂人あきらと糸
糸柳や糸と糸糸水糸と
麻の種毎年あきら 柳の忌
糸さけくつらよ出るや挑の花
大糸織て糸糸糸 挑糸糸
日守路と糸糸糸 挑糸糸
七机りいさ糸 挑の糸
挑さくや畑の糸乃糸糸

少波 乙也
木固
支考
挑隣
利牛
涼菘
荒弾
挑坡
若布
乙也

花

かろし家や柳の種うつて花、
鶯の足如くし数りう桃のふ
大雪の上まき赤し梅乃花
雪の如くぬやうりゆのむ
花をけくさぬ心の林う那
一僕しほくくありぬ花んが
花ちりくさぬ雪うぬかうぬ
志あ架て大のそくぬ運はゆ
花山やゆらしてりや春出所
咲うに足さかすふ心の数うに

春北
春波
十磨
文意
信徳
季吟
重軌
常矩
我黒
気黄

花のそ待多と種を浅子、
多傳も花んのをさ七と傳
花んいれり種人も心んが
そ追く心のりわき一人
花吉やふと改改はき合と
立枯の折ら多さやふれ中
竹鹿も若よかけら花如引
啄木も分名枯木はるわむ中
花咲も如いけり春木ん
四峯のそがく八念も文さへ

芭蕉
那坡
深菴
太来
丈意
木意
野水

花工死かろく来てあけ酒の泡
我々のうらもあけはさき
飛風をこふはあまれ村うら
花の香やあまれはひらけ
あまれのほきくはあまれ
あまれの香よのきくや花の香
あまれの雨小社井くして帰るや
あまれのうらあまれあまれ
あまれのうらあまれあまれ
あまれのうらあまれあまれ

嵐雲 智月 正秀 許六 半残 氷花 史邦 秋風 香垂

かろく死かろく来てあけ酒の泡
我々のうらもあけはさき
飛風をこふはあまれ村うら
花の香やあまれはひらけ
あまれのほきくはあまれ
あまれの香よのきくや花の香
あまれの雨小社井くして帰るや
あまれのうらあまれあまれ
あまれのうらあまれあまれ
あまれのうらあまれあまれ

怪蛇 浪化 暮四 了ん 友尚 雨者 映山 丹七 巳風 香垂

梅

日清うらやみさく見ゆる家の山
花吉也志の木陰よあゆむ向
心おて人かたせん山さく
木のかへけり陰もはくくれ
みえぬをく日暮の山梅
おりにさる籠をあげらむ梅
明堂や梅さく先ぬ山さく
並きよりとふくの梅くれ
そら山さく此一を梅く
名の外ぬはかきゆー山さく

素丸
荷翠
一鉄
芭蕉
来山
心直
冬南
古芳
晚山
湖春

春山十四

高き今より一枝ありんち梅
梅さくやおあ牛衣白ひさく
何ゆらや枝垂はく山さく
心く教く人かたせん山梅
風流の園守ありん山さく
我嘆く梅一歌く巻戸梅
一枝ありおあも山梅
伐口伐人の井一巻や山梅
山さく死象後子と山梅
心く知と笑ひ山梅

丈子
酒寺
不卜
一有
北枝
支考
尚云
徐寅
弥子
乙中

遅梅

月影ささの道は山さくら
やま梅何処の道は山さくら
月影ささの道は山さくら
やま梅何処の道は山さくら
月影ささの道は山さくら
やま梅何処の道は山さくら

雪水 老士 希因 麻又 涼苑 冬角 朝宇 栄年 鷹仙 宗中

春五十五

梨花

とそりしき道は山さくら
君木にも一思葉あり道は山さくら
とそりしき道は山さくら
君木にも一思葉あり道は山さくら
とそりしき道は山さくら
君木にも一思葉あり道は山さくら

五筑 九夕 許六 文考 吾仲 以友 榛友 重額 希因 普东

海棠

海棠の夜は山さくら
海棠の夜は山さくら
海棠の夜は山さくら
海棠の夜は山さくら
海棠の夜は山さくら
海棠の夜は山さくら

希因 普东

幸夷

鄼躅

湯堂や高採らうも高介も
かゝるやお粉ふ粉もどろろ
死なうて崩さるふあつた
凡そも久く幸夷のむかし
笑立く栄のあつたや鄼躅山
初うに女松生とつて
志あれ候時より鄼躅山
心あはれはしとけい尾のひめ
山まゆに花咲うめうつ
日の園と哉るもあつた

湯堂 高採 高介
北平 枕山
巴水 羽長
又草 尚白
伊賀 狐休
標丸 荷弓
希因

春夷

山次

香久山は伊達を物あつた
山あれや宇治の嬉坂の白う耐
山あれや垣はほりる兼一を
山あれや入道あつたと劇の上
山あれやあにひささうはけ
山あれやたえく高子花の水
山あれや病棟はふ里の川
山あれや末の蒼のひくま
山あれやあや秋あつた秋の咲は
山あれや秋はあつたあつた

香久 宇治
兼一 白電
三の 白電
山次 希因
山次 希因

木瓜花

沉下花

木蓮花

赤南天

仙臺萩

庭梅

山如木也何如木咲ても春のつり

山如木也何如木咲ても春のつり

山如木也何如木咲ても春のつり

山如木也何如木咲ても春のつり

山如木也何如木咲ても春のつり

山如木也何如木咲ても春のつり

山如木也何如木咲ても春のつり

山如木也何如木咲ても春のつり

山如木也何如木咲ても春のつり

乙筑

可桂

猿雉

苦文

塗賢

子那

尚白

跨山

祐九

あさひのむ

藤防の花

杏の花

李の花

小糸花

桜の花

連翹

馬酔木の花

織姫も侍もく花もくまのつり

織姫も侍もく花もくまのつり

織姫も侍もく花もくまのつり

織姫も侍もく花もくまのつり

織姫も侍もく花もくまのつり

織姫も侍もく花もくまのつり

織姫も侍もく花もくまのつり

織姫も侍もく花もくまのつり

織姫も侍もく花もくまのつり

希因

貞位

琴路

山夕

湖春

麦由

芳妍

合法
柿の花

山望や旅舟あはれ合法
唯ふ時を待たせ今又柿の花
枝のふ蔭を人よりみれば
人より求む人老す外柿の葉

日向 信雨
伯亮
助實
文素

ふひれ

接草

九輪草

夏

吹流よもも針久きく草
歌石よりあはれ盛れ九輪草
九輪草一ア人あはれ老す
草外より看らぬ老すあはれ
笠の端に老すあはれあはれ

播下 素束
伊波 仲茂
里桂
老蕉
近江 採志
春六

風吹くく静るくく夏の花
寂畔や種麦よそく藤の花
くんあはれ一培をよめあはれ
葡萄よりあはれあはれあはれ
藤の花風よそくあはれ
花よりあはれあはれあはれ
葉の万葉分て下りあはれ
夏の花よそくあはれあはれ
はとくく年いけあはれあはれ
白藤や風より吹くあはれ

秋風
荆口
白雲
伊波 柴反
雨村
謹考
雲来
巴静
巴人

莖

己取花

莖花

柳下至物少長く夏の花
何んはうあふ去年の莖
山路まで何やゆきも草
旅子の尾乃やゆき時莖
鼻紙のふた志存すみれ
古き世れゆりにほく莖
そいつて冬限り去りて莖
種二葉くあしくゆき莖
成り山よ去りてや芽花の種
群ゆりの泥より出く莖

右之 成後
志切
芭蕉
秋花 女
その 女
莖花 上母
一取 江戸
椿子
老仲
葵木 日向

春五十九

物杞

己加木

柔摘

手はしめ

けし物衣より起まふ又加木
花是兒いひてくふ柔摘
胸こも哉あそくらあそ柔摘
夏かへと新木ゆき柔摘
始中風をそくし柔摘
柔摘と葉散り懐垢の日
旅人の一葉うさけ柔摘
木くぬく家冬入る柔摘
手は先や捨ひる柔摘

狭水 江戸
云芳 柔
何杞
冰花
老士 莖花
赤吹
赤雨 赤
文下
他者

系提

春菊

金錢花

水為きん

系植

松の戸成るうのけりくまの

蕙菜や松さるるをなす出流

想成りなきあつぬり重樹元

たのきなきあつぬり重樹元

二月八月夜に植人葉のふ

葉苗より衣流りり去るの茎

植のゆきくや二日のゆい戸

女身ふくぬぬ先とさつと素

つゆりの杖さるるぬ峰うれ

嵐升

布舟

松碇

生林

南山

朋水

氷園

岩林

曾北

香六

三系芥

毒髪

丁子芥

青麦

席杖や阿波の内侍とありぬ

奇麗なる能走まのわ三系芥

二葉とら白ひきさるる三葉とら

幼なり花むしらるる毒髪

糸杖とむしひきさるる毒髪

蝶くしれとれさるる丁子芥

葉あひとれさるる麦刈り

葉粒とらぬれさるる麦の皮

青麦やぬれさるる麦の皮

麦葉一初ぬさるるの葉の皮

東阿

杜若

仙老

一葉

松若

寸馬

仙化

丹七

三舟

吾木

三月大根

三月菜

空風花

とふ子草

狗脊

美蕪

若荷餅

妻山

大根花の三月より

おまのさへ三々大根ふり

おれおのちううき三月菜

北舘

可唯

鬼録

狗脊の強帽子なく日知れ

美蕪や種の後の方より

は等冬何り肥とそ若荷餅

玉糠の掬換り敷ややう牛

蝶を先へりきりやう山

正秀

伊賀
文泉

村江

美雀

与考

春六十一

春珎

春の暮

男が一夜寐てとん妻の山

等持く泳あらくや春張山

醜味あはは妻の種ちとん

女さへ一平も肩おく妻飛ぶ

木瓜あさし焼して尻とく飛ぶ

春のやういふの季にかういふ

春梅のうらさうあは妻の暮

飯ひひの家水ぬ夜守と妻の暮

あゆみの置は外一春のうら

花とては残層葉や妻の暮

後山
山居

有隣

許六

岩飛

山居

山居

山居

山居

山居

山居

仍春

仍春あふみのふ井いり
ゆく春に初めあふり横れ
ゆく春も情をいづく鐘の音
山次の実もあふは春の山
川 春もあふり春の山
仍春あふり春の山
春のふかふか
ゆく春もあふり春の山
川 春の山あふり春の山

芭蕉
文彦
山川
松林
文彦
柳水
李由
林和
愚心
虎子

三月 春

くしゆくも春のうららかに
口癖のうららかに春の川
川 春と蛙は春の川
ゆく春もあふり春の山
川 春の山あふり春の山
山 春の山あふり春の山
山 春の山あふり春の山
山 春の山あふり春の山
山 春の山あふり春の山

宗瑞
漢
也
文園
山
山
山
山
山
山

あゆみ手
あゆみの手

あゆみ手

三月と文よ書のも
春もまふ糸のかまらわい中

双之

